

# 本島中部及び周辺離島

地域を定めず指定の天然記念物  
(本島中部及び周辺離島)

- コウノトリ(p138)
- オカヤドカリ(p148-149)
- ジュゴン(p152-153)
- イイジマムシクイ(p165)
- フタオチョウ(p172)
- コノハチョウ(p173)
- イボイモリ(p175)
- クロイワトカゲモドキ(p176-177)  
(マダフトカゲモドキを含む。)
- アマミヤマシギ(p187)







# チャー

指定年月日:1991(平成3)年1月16日 保存団体:天然記念物チャー保存委員会

DATA

学名 *Gallus gallus domesticus*

チャーは、体重がオスで約2kg、メスで約1.5kgになる中型の鶏です。脚は短く、体型は丸みをおび、羽色は黒色型、白色型、五色型、黒白型に分けられます。普通の鶏と異なり、顎には肉垂がなくひげが生えています。特に鳴き声には特徴があり、「ケツ・ケツ・ケツ」と三音節からなりますが、初めの二音を長く、最後の「ケツ」の音を短く締めくくることが良い鳴きとされるようです。

チャーの由来はよくわかっていませんが、琉球国時代の海外貿易の際に、中国や東南アジアから他の家畜とともに持ち込ま

れたものと考えられています。その後愛玩用(今で言うペット)、特に鳴き声を楽しむための鶏として定着しました。

戦前は各地で多数飼われていましたが、第二次大戦でその数はたいへん少なくなりました。近年の血液型の研究によると、本土で飼われる日本鶏とは遺伝子構成が異なり、烏骨鶏やアジア起源の鶏と共通の祖先を持つと考えられています。



五色型



黒白型の碁石



鳴き声コンテスト(沖縄こどもの国にて)

## しょうめつ 消滅した天然記念物 「宜野灣街道ノ松並木」

戦前の沖縄には、リュウキュウマツの並木や大木が随所にあり、風景に美観を添えていました。中でも宜野湾村の松並木は普天宮から首里に通じる主要な街道にあって、村のシンボリック的存在として有名でした。大正時代、沖縄の天然記念物候補を調査した植物学者中野治房は「正二日本帝國ノ二大記念物トスルニ松デザルモノ」とまで讃賞しています（もう1件は、最良地蔵のオヒルギ林）。そして、「宜野灣街道ノ松並木」は1932（昭和7）年10月19日に国の天然記念物に指定されました。指定当時、並木松は約3,000本ありました。

沖縄戦では「沖縄神社拜殿（首里 滅正殿）」や「首里城 守邊門」等11件もの旧国主建造物が破壊・焼失しましたが、「宜野灣街道ノ松並木」も戦禍を被っています。1945（昭和20）年の米軍上陸前には日本軍が大量に伐採しました。倒した松で米軍の進攻を妨げようとしたようです。戦中から戦後にかけては、米軍も伐採し普天間飛行場の建設資材等に使っています。さらに松食虫や台風による被害も加わって1950年代半ばには普天間港から野嵩高校（現普天間高校）のあたりにかけて30本程度を残すのみとなります。そしてこの頃、宜野湾村の開発計画が持ち上がり、商店街整備と松並木のどちらを優先するのが議論になりました。このとき伐採に反対した側には、芸術家で琉球政府文化財保護委員会の専門委員でもあった山田真山もいました。琉球政府文化財保護委員会は、1954（昭和29）年9月23日の会議で「宜野湾村普天間松並木を天然記念物として指定するかどうかについて」という議題を審議しています。結論は「普天間の松並木は戦災を受けて伐採されたのと、松食虫の被害によって次々に枯死する現状にあって天然記念物として指定する価値は失っているので、法による指定保護はしないが地元村によって良心的に管理、保護させる方が良策という結論を得たので、当分は指定は控えることにする」というものでし

た。こうして、松並木は1958（昭和33）年頃姿を消しました。

ところで、「宜野灣街道ノ松並木」はいつ国指定文化財でなくなったのでしょうか？戦後、米軍統治下における沖縄では日本の施政権が停止されましたが、これは沖縄に施行されている日本法が廃止されたのではなく「休眠状態」になったことを意味します。松並木に関して言えば、数しく毀損しながら戦後も国の天然記念物として存在していたと考えられます。しかし、米軍や宜野湾村の伐採を止めるという日本法に基づく行政行為は出来ませんでした。天然記念物に限らず、国の指定文化財が消滅等した場合は指定取消の手続きが執られ官報で告示することになっていますが、松並木については解除手続き、官報告示ともにされていません。これも、日本の施政権が停止されていたからです。現状変更を止めることが出来ず、法に基づく管理も出来ないまま、実体としての松並木は消えていったのです。



写真：宜野湾市立博物館





# 本島南部及び周辺離島





## 識名園のシマチスジノリ発生地

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 那覇市字真地

## DATA

学名 *Thorea gaudichaudii*

指定経緯

1924(大正13)年12月9日、旧指定「ちすじのり発生地」

1955(昭和30)年1月25日、国政府指定「しまちすじのり」

那覇市にある識名園育徳泉は、藻類学者岡村金太郎(1867~1935年)の調査結果に基づき、1924年12月9日、鹿児島、長崎の産地と一括で国の天然記念物「ちすじのり発生地」に指定されました。沖縄県初の天然記念物の誕生です。しかしその後の研究で、3産地の藻類はいずれも岡村が同定した種ではなく、かつ互いに別種であり、鹿児島産のものは新種であることが分かりました。これを受けて、鹿児島の新種に改めてチスジノリの和名を与え「川内川のチスジノリ発生地」、長崎のものを「土黒川のオキチモズク発生地」、そして沖縄のものは「識名園のシ

マチスジノリ発生地」と、別々の国指定天然記念物として整理されています。

育徳泉では1960年代後半からシマチスジノリが見られませんでした。2003年の3月に突然繁茂し関係者を驚かせました。この出来事は、消滅したように見える生息地でも環境条件が整えば復活する可能性があることを示しています。

国指定天然記念物

植物



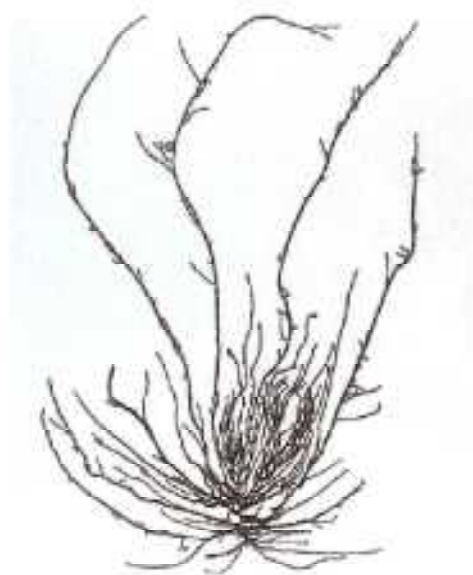
識名園育徳泉

※





職名園



シマチスジノリ標本写真  
(2019年11月2日 宮城島タチチガー)

※※

**用語の  
解説**

**どうして  
同定**

正体が不明な生物に対して、体の  
特徴などをもとに、どの種である  
かを判定すること。



岩内のシマチスジノリ

※



# しゅりきんじょう おお 首里金城の大アカギ

指定年月日:1972(昭和47)年5月15日 所在地:那覇市首里金城町3丁目

DATA

学名 *Bischofia javanica*

指定経緯

1961(昭和36)年6月15日、琉球政府指定「首里金城  
拜殿の大赤木群」

アカギは、ポリネシア、オーストラリア、東南アジアから沖縄にかけて分布する樹木です。沖縄では各地で見られますが、八重山以外のものは植栽されたものという説もあります。那覇市にある「首里金城の大アカギ」には、琉球政府が指定した時から残る大木が6本ありましたが、2012年9月の台風17号で1本が倒れ、現在は5本となっています。

大アカギは、首里金城町の内金城御嶽境内に生育しています。御嶽は東側の大嶽と西側の小嶽に分かれており、後者が「琉球国旧記」(1731年)にある鬼餅伝説ゆかりの場所です。首里は沖縄戦で激しい被害を受けま

したが、金城町は砲弾の死角にあったため大アカギや石畳道は戦禍を免れました。小嶽にある胸高周囲9.8m、推定樹齢350年の個体は、現存するものとしては恐らく沖縄島最大のアカギだと思います。歴史の変遷を数百年に渡って人々と共にくぐり抜けてきた大アカギは、これからも地域を見守り続けることでしょう。

国指定天然記念物

植物



大アカギ (No. 6)





大アカギ (No. 1)



大アカギ (No. 2)



大アカギ (No. 4)



大アカギ (No. 5)





# な が し ま う ふ い し 仲島大石

指定年月日: 1958(昭和33)年3月14日 所在地: 那覇市泉崎

首里王府時代、久米村の人々は仲島大石を「文筆峰」と呼びました。また、風水の見地から、久米大通りを龍身、久米村大門を龍首としたときに龍の珠に当たるものとして大切にしていました。

大石の北から東側一帯は昔「仲島」と呼ばれる中州で、大石は海中に立つキノコ岩でした。根もとの方がくびれているのは、波や貝などに削られたためです。

「球陽」(1745年)によると、仲島は1672年に整備され宅地化します。この頃大石周辺

も埋める計画があったようですが、久米村の人々が阻止しました。明治初年の俯瞰図を見ると、大石は海岸道路の海側にポツンと立っています。明治時代末に大石の南から西側の埋め立てが始まり、1914年には隣に県営鉄道の那覇駅ができました。埋め立て工事は1918年に完了し、現在の旭町などになります。戦前、那覇駅は与那原、糸満、嘉手納に向かう汽車が絶え間なく行き交うところで、大石は汽車から出る煤煙で汚れていたそうです。



那覇バスターミナルの構内。県立図書館のあるビルの西側にあります。





根もとがくびれている様子。波などでけずられたもので、ここが海岸であったことを示しています。



北側からみた仲島大石



1950年代の大石の様子



1959年の写真。右上に仲島大石が写っています。同田の開発が進む中、仲島大石は大切に保存されてきました。



# 琉球犬

指定年月日:1995(平成7)年12月22日 管理団体:琉球犬保存会

DATA

沖縄には元々野生のイヌはいません。沖縄の最も古いイヌは、今から約5500年前の曾  
 祖式土器とともにその骨が出土しています。  
 曾祖式土器は九州から沖縄に運ばれた土器  
 なので、イヌもその当時、人に連れて来られ  
 琉球犬の祖先になったと考えられます。

琉球犬の遺伝的特徴は、南アジアの古い  
 イヌに由来する遺伝子である「イヌ血球ヘモ  
 グロビンB型遺伝子(Hb<sup>B</sup>)」と「イヌ血球ガ  
 ングリオシドモノオキシゲナーゼa型遺伝子  
 (Gmo<sup>a</sup>)」を持ち、北方アジアのイヌに特有  
 の「Hb<sup>A</sup>」と「Gmo<sup>2</sup>」をほとんど持たないこ  
 とです。日本にははじめ南アジア系のイヌが

学名 *Canis lupus familiaris*

持ち込まれ、縄文時代には全国に広がってい  
 きました。弥生時代に朝鮮半島から渡来人と  
 ともに北方系のイヌが流入したため、本州の  
 日本犬にはその遺伝子が混じりましたが、北  
 海道と沖縄では北方系のイヌの影響はわず  
 かで縄文犬の血統が維持されました(田名  
 部, 1996)。琉球犬は、立ち耳で差し尾の個  
 体が多く、鼻と顔の間にある段差「ストップ」  
 が浅いことなど、古いタイプのイヌの特徴を  
 持っています。琉球犬は日本における人の移  
 動を考える上でも重要なイヌなのです。



琉球犬(アカトウラー)

県指定天然記念物

動物





## 琉球犬の特徴

毛色：赤トラ、黒トラ、白トラ、赤犬の四色



赤トラ  
(アカトッラー)



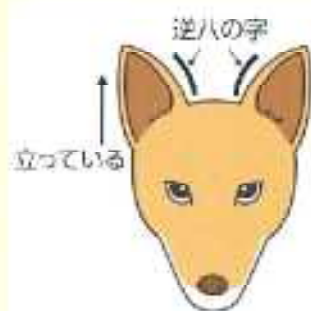
黒トラ (クルトッラー)



赤犬 (アカイン)



白トラ (シルトッラー)



耳：立ち耳



尾：差し尾



頭：ストップが浅い

平均的なサイズは、  
体高 約46cm  
体長 約51cm  
体重 16kgで  
中型犬に属するよ。



用語の  
解説

曾畑式土器

熊本県宇土市の曾畑貝塚で最初に出土したことから名付けられた縄文時代の土器。朝鮮半島から九州・沖縄まで広く分布している。



# く だ か じ ま か い が ん し ょ く ぶ つ く ん ら く 久高島の海岸植物群落

指定年月日: 2015(平成27)年10月7日 所在地: 南城市知念字久高原、同久高原、同大浜原、同神谷原

## DATA

## 指定経緯

1995(平成7)年12月22日、県指定「久高島伊敷浜の海岸植物群落」

1995(平成7)年12月22日、県指定「久高島カペールの植物群落」

※県指定の「久高島伊敷浜の海岸植物群落」と「久高島カペールの植物群落」が1つにまとまって国指定天然記念物「久高島の海岸植物群落」となった。

南城市知念にある久高島は周囲8kmほどの小さな島ですが、琉球国時代から最高の聖地として守られてきたため、多くの海岸植物群落が残っています。岩礁海岸にはウコンイソマツやモクピヤッコウの群落があります。砂丘地にはグンバイヒルガオやハマアズキ群落があり、そこから内陸側にモンパノキやクサトペラ群落、さらにソテツやアダン、ピロウ群落と続きます。また、島の中央部などにはアカテツやハマビワ群落があります。このように久高島では、琉球列島の海岸植物群落が带状に配置されている様子が、極め

て良好な状態で見られます。

指定地には、久高島の重要な御嶽やイザイホーなどの祭事の場所も含まれており、これまで長年にわたり地元久高区が中心となって守ってきた場所です。



島の東側一帯の海岸植物群落及び北側の林の大部分、そしてフボー御嶽周辺が指定地となっています。





伊勢浜。昔、五穀の入った壺が流れ着いたという伝説があります。



カベール。琉球の創世神アマミキヨが降り立った場所と言われています。



徳仁港方面からカベール岸方面をみた海岸植物群落遠景。海岸から内陸にかけて、植物群落が帯状に変化しているのがわかります。



海岸植物群落近景。写真手前の海岸近くには比較的背の低い植物が生育し、写真後方の内陸部になるにつれて背の高い植物が生育します。

#### 用語の解説

#### イザイホー

久高島に伝わってきた行事。12年に一度、午（うま）年の旧暦11月15日から4日間におこなわれる。後継者不足のため、1978年を最後におこなわれていない。



# 佐敷町富祖崎海岸のハマジンチョウ群落

指定年月日: 1961(昭和36)年6月15日 所在地: 南城市佐敷町富祖崎

## DATA

学名 *Myoporum laetifolium*

指定経緯

指定時の名称「佐敷町富祖崎海岸のハマジンチョウ群落」

ハマジンチョウは、熱帯アジア、中国南部から日本にかけて分布する低木で、国内では沖縄県、鹿児島県西部、熊本県、長崎県、三重県の海岸域の湿地に生育しています。果実は海を2カ月以上漂流しながら生存する能力があり、海流によって分布を広げます。本土の分布域には群生地が見られますが、沖縄では点在することが多く、群生状態が観察できるのは富祖崎海岸だけです。

この群落は、佐敷中学校の瀬底マサ子教諭が1960年に発見し、当時琉球政府文化財保護委員会の主事で植物学者でもあった

多和田真淳(1907～1990年)が種を同定しました(伊禮, 1989)。群落は富祖崎公民館南側で、コンクリート護岸内側の潮汐の影響を受ける水路際に生育しています。ハマジンチョウはメヒルギ群落と接するような形でメヒルギ群落より水面から離れた側にあり、1～3月には紫色の斑が入った可憐な花を咲かせます。



ハマジンチョウの群落

ハマジンチョウの花と葉

## 用語の解説

## 同定

正体が不明な生物に対して、体の特徴などをもとに、どの種であるかを判定すること。



# 喜屋武海岸及び荒崎海岸

指定年月日:2012(平成24)年9月19日 所在地:糸満市字喜屋武、同字末里

糸満市

喜屋武海岸および荒崎海岸は、沖縄島の南端、喜屋武岬に隣接する一帯の海岸です。ここでは、海岸段丘と呼ばれる過去の地殻変動によって海水面が上昇してできた地形や、琉球石灰岩が波に削られることでできたサーフベンチ（波食棚）など、様々な海岸地形を見ることができます。

また、植生に関しては、波しぶきを受ける

## 指定経緯

2006(平成18)年7月28日、国登録  
2012(平成24)年9月19日、登録抹消

DATA

ところから陸側の低木林に至るまで、広い面積にわたって海岸植生特有の帯状分布が見られるなど、独特の地質・植生を観察することができる貴重な場所です。



指定地（一部）の遠景

国指定天然記念物

植物

地質



ナガエソナレムグラ



ナハエボシクサ



# セラマジカおよびその生息地

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 座間味村屋嘉比島、同慶留間島

DATA

学名 *Cervus nippon*

生息場所

屋嘉比島、慶留間島、阿嘉島、外地島

指定経緯

1955(昭和30)年1月25日、琉球政府指定

「慶良間島」(所在地: 屋嘉比島)

1985(昭和60)年6月24日、追加指定(慶留間島)

慶良間諸島にすんでいるセラマジカは、日本で一番南の地域に生息する野生のシカとして有名です。慶良間諸島のうち、屋嘉比島と慶留間島に生息するものが、生息地とともに指定されています。

セラマジカは、もともと慶良間諸島にいたわけではありません。今から380年くらい前に、九州(鹿児島県)から久場島に持ってきたと言われています。その理由は十分に明らかにはなっていませんが、一つには首里王府が冊封使をもてなす料理の食材として使うために放したと考えられています。この考えを裏付けるものとして首里城跡からは、発掘調査によりシカの骨が見つっています。しばらくするとセラマジカは他の島に広がり、大正期のはじめには慶良間諸島全局に生息していたようです。その後、大正期に久場島

や屋嘉比島で銅山開発が始まると捕獲されるようになり、屋嘉比島と慶留間島以外の島では絶滅したようです。1975年頃から阿嘉島では再度見られるようになってきました。

本土のシカに比べると、頭や角が小さく、体全体もやや小さめです。また、体の色もかなり黒く、メスや子ジカの背中には黒いすじがあります。亜熱帯の小さな島で生きていくなかで、体のつくりや模様が少しずつ変化してきたと考えられています。



阿嘉島の海岸に出てきたセラマジカのオス(手前)とメス(向こう側)





阿嘉島の住宅地近くで見られた若い個体。阿嘉島では大正期後半に大がかりな駆除があって、一時絶滅しましたが、1975年頃から慶留間島や屋嘉比島から渡ってきた個体が見られるようになって、現在では普通に見られるようになっていました。



一歳になったケラマジカ。ケラマジカの角は、毎年3月頃に根元から落ち、また同じ場所から新しい角が生えてきます。年を追うごとに角は枝分かれし、4歳くらいには立派な角になります。角はオスだけに生え、繁殖期のオス同士のけんかに使われます。



慶留間島のケラマジカ生息地となっている山地林

※



慶留間島の低地の森。ケラマジカの個体だけでなく、屋嘉比島と慶留間島の生息地も、天然記念物として指定されています。

写真：※ 阿井 隆 ※※ 三木 俊 英 雄



## ケラマジカ調査が残したもの

慶良間諸島に生息するケラマジカについては、二度にわたって具の調査が行われています。第一回目が1975年から1978年にかけて、第二回目が1992年から1995年にかけての調査です。ここでの話は、第一回目の調査時のエピソードになります。

屋嘉比島は、昔は銅山開発で栄えた島でしたが、今では無人島となっています。海岸近くの平坦地にある集落跡は、アダンやモンパノキが生い茂り、人間を寄せ付けないジャングルになっていました。それでも、浜辺の砂地の広場には、背丈の低いハマゴウなどが茂るだけで、テントを張るには支障はありませんでした。ここに食料や水などを持ち込んで、6日間の調査とテント生活がスタートしました。

調査は植物班と動物班に分かれていましたが、動物班の隊長は、今は亡き琉球大学の名誉教授であった池原貞雄先生です。主な調査は、ケラマジカのフン探し、食べた植物の痕跡探し、シカの歩いた跡を追跡して行動範囲を推測することなどでした。毎日、毎日、ひたすらケラマジカの資料を求めて、島中を歩き回っていました。特に食べた植物の痕跡探しと行動範囲の推定調査は、森の中だけでなく、ススキやアダンの

畝に入っては激しい藪薙ぎもいとわなかったものでした。それでも池原先生の出で立ちが、小さなリュックに必要な道具を入れ、首からは双眼鏡、手にはコンパクトカメラをぶら下げるといったものでした。弁当持参の調査は、朝から夕方まで、島中を歩き回るといったものでした。もちろん、調査の合間には休憩をとったり、昼食をとったりします。その時はくつろいで、皆でおしゃべりを楽しんだりもしました。そんなこんなで、調査員全員が疲労感を覚える中、調査の全日程は終了しました。

帰りの船の中で、池原先生のスタイルに少し違和感を覚えました。よくよく見てみると、いつもぶら下げているコンパクトカメラがありません。「先生、カメラはどうしたのですか？」とたずねると、先生は「また来年も来るから、調査備品として屋嘉比島の森に置いてきた。」と、こともなげに言うのです。何のことはありません、調査中に森の中に落としてきたようです。コンパクトカメラとはいえ、当時としてはまだ高価なものでした。それでも、余裕を持って、置いてきたと答えられる。多くの教官や教師、学生たちから慕われた池原先生の人柄を感じさせる一幕でした。



空から見た屋嘉比島。(2004年6月15日撮影)  
島の下側に見える長い砂浜とアダンの境目くらいにテントを張って、キャンプ生活をしながら調査を行いました。



# く め ご え 久米の五枝のマツ

指定年月日: 1997(平成9)年7月28日 所在地: 久米島町宇上江洲

## DATA

学名 *Pinus luchuensis*

指定経緯

1959(昭和34)年12月16日、琉球政府指定  
「久米の五枝の松」

久米島町にある五枝のマツは、高さは6mほどしかありませんが、大きな枝を地面に沿って10m以上も伸ばし、全体として深皿を伏せたような姿をしています。このような樹形のリュウキュウマツは、この木だけと言われます。

久米島具志川間切の地頭代を務めた上江洲家の「家記」(1872年)によると、名物であった先代マツが1837年の台風で失われたため、十代智俊が新たに「似合之小松」を見つけてきて1839年に植えています(上江洲, 1981)。先代マツは高さ「二尋壹尺」、横「七尋」、すなわち高さ4m、横13mで、五枝のマ

ツと同じような平たい樹形であったことが分かります。「家記」の「小松」が現在の五枝のマツだとすると、樹齢は180年余りということになります。その場合、先代と同様の樹形に成長したことになりますが、元々似た形の木だったのでしょうか。それとも地形や主な風向きなどの関係で、この場所に植えるとこのような優雅な樹形になるのでしょうか。

国指定天然記念物

植物



久米の五枝のマツ全景



# 久米島町奥武島の畳石

指定年月日: 2014(平成26)年7月29日 所在地: 久米島町宇奥武、同地先の海面

DATA

## 指定経緯

1967(昭和42)年4月11日、琉球政府指定

「仲里村奥武島の畳石」

2002(平成14)年7月16日、現名称に変更

久米島の東にある奥武島の海岸では、大きな亀の甲羅のような岩の集まりを見ることができます。これは地元では畳石と呼ばれ、よく見ると直径1mほどの六角形や五角形の岩を敷き詰めたような作りであることがわかります。

この岩の正体は、第三紀鮮新世(数百万年前)の火山活動の際に、地下から噴出した落岩で、冷え固まるときに縮んだため生じた割れ目(節理)のせいでこのような形となったものです。割れ目は地下深くまで続き、岩が柱のような形をしているので柱状節理と

言います。福井県の東尋坊や兵庫県の玄武洞では、長い柱状の様子を見ることができます。久米島の畳石は、柱状節理が波によって削られ、その横断面が地表に現れたもので、過去に火山活動が行われていたことを示すとともに、琉球列島の成り立ちを知る上でも重要なものです。

国指定天然記念物

鉱物地質



畳石。まるで人工物のような形の石が整然と並んでいます。



上空からの様子





# うね おお 宇根の大ソテツ

指定年月日: 1959(昭和34)年12月16日 所在地: 久米島町宇根

久米島町

DATA

学名 *Cycas revoluta*

ソテツは宮崎県から琉球列島の島々や中国まで分布し、街路樹や庭木としてもなじみのある植物です。一般に、海岸近くの風が強く吹き付ける傾斜地や崖地に生えるため、高さもせいぜい2mくらいにしかありません。久米島町宇根の喜久村家の庭には、枝ぶりのみごとなソテツが生えており、最も大きな枝では、高さ4.5mになります。また、その枝振りには他に類をみないくらいの美しさを誇っています。このように大きく生長したのは、屋敷林に囲まれているため、台風などの影響を

さけられたことや、保護・管理が行き届いているためと考えられます。このソテツの樹齢は250～300年と言われていますが、確かなことはわかっていません。

2018年と2020年には、枝の一部が枯死したことから、その部分の切除がおこなわれています。



屋敷の南側にある株

県指定天然記念物

植物



# まじや 真謝のチュラフクギ

指定年月日: 1970 (昭和45) 年 5 月 19 日 所在地: 久米島町字真謝

DATA

学名 *Garcinia subelliptica*

指定経緯

指定時の名称「仲里村真謝のチュラフクギ」

2002 (平成14) 年 7 月 16 日、現名称に変更

久米島町真謝の、集落内をとおり県道沿いに約40mにわたって生えているフクギの並木です。フクギは生長が遅い木ですが、材質は硬くて丈夫です。そのため、防風や防火の目的で屋敷の周りに好んで植えられてきました。このフクギ並木も、もともとは大きな屋敷林で、隣り合った他の屋敷林とともに美しい景観をつくっていたもので、推定樹齢は200年以上とされています。「チュラフクギ」は「美しいフクギ」という意味で、整えられた並木の美しさから名付けられたとも言われています。

指定当初は、幹周り1m20cm (胸高直径

約40cm) 以上の大木が屋敷の周囲を囲むように76本、このうち道路に面した指定地内には21本あったようですが、1973年に行われた県道を広げる工事のために大部分が切られ、現在保存されているのはかつての一部分となっています。

真謝のチュラフクギは、沖縄の伝統的な集落景観を今に伝える貴重なものです。



フクギ並木の全景



# あぐにそんあざにし うがん しょくぶつぐんらく 栗国村字西の御願の植物群落

指定年月日: 1980(昭和55)年4月30日 所在地: 栗国村字西土倉原

栗国村

栗国島の西集落の北西部は、琉球石灰岩の地層が断層でくずれてできた高さ20mの崖地となっています。ここにはエーガースク、ミルクガマ、ガタノコ御嶽などがあり、島の人々は西の御願と呼んで古くから大切にしてきました。そのため高さ8~12mのアカギやハマイヌビワ、クロヨナなどの鬱蒼と

した森が残されています。崖の上には、ヤブニッケイやクロヨナ、ハマイヌビワなどが生い茂った森が発達しています。この森は、栗国島の中でもわずかに残されている森林地帯であり、栗国島の自然状態の森を知る上で貴重なものです。



植物群落の遠景



林内のアカギの大木



琉球石灰岩の崖地

県指定天然記念物

植物



ながはくがいへきおよ がいすい とくしゅしょくぶつくんらく  
長幕崖壁及び崖錐の特殊植物群落

指定年月日:1975(昭和 50)年3月18日 所在地:北大東村宇中野、同字南

北大東島は、ドーナツのようなかたちをしたサンゴ礁(環礁)がプレート移動にともない隆起してできたと言われています。島を縦に切った断面は「凹」のような形をしています。この「凹」の内側の屏風を立てたような絶壁にあたるところは長幕と呼ばれ、この崖の壁面とその下部の崖錐地帯に北大東島の自然植生がよく残されています。崖の上にはオオイタビやヒレザンショウなどが生え、

崖面や崖下にはハマオモトやハマイヌビワなどが生えています。その他、ダイトウセイシボクやダイトウワダン、ダイトウシロダモ、ルソンヤマノイモ、ヒメタニワタリといった、植物の分布を考える上で貴重なものがあります。特に1972年に発見されたヒメタニワタリは、北大東島以外では東京都小笠原諸島の母島と中国海南島にだけ自生しており、植物地理学的にも貴重な植物です。



西側から東方向をみる





内側からみた長葦。北向きのため直射日光がほとんどあたりません。(1990年頃)

\*



ヒメタニワタリ



ヒレザンショウ

用語の解説

崖すいり帯 崖錐地帯



崖や急斜面の下に出来た円錐状の地形のことを崖錐と言う。崖上から落ちてきた石や砂が堆積した場所で、一般的には石や砂の粒が均一でないため保水力が低く、植物にとって過酷な環境とされている。



長葦の上からみた北側斜面。近くにハマオモト。先にダイトウヒロウがみえます。

\*



ダイトウヒロダモ



きただいとうそんあざなかの ほくせんどう  
**北大東村字中野の北泉洞**

指定年月日: 1985(昭和60)年3月29日 所在地: 北大東村字中野58番、59番

北大東島北部、字中野にある鍾乳洞です。洞穴の入口部は標高約39mの幕上にあり、もともと出入口のない地下の空間であったものが、天井の一部がくずれ落ちて入口になったと考えられています。洞穴の長さは150mですが、面積は1700mもあります。洞穴の入り口付近から第一のホールまでは、第二次大戦時に防空壕として使用されました。洞内の二次生成物によく発達し、リムストーン、リムプール(石灰華段丘)、フローストーン、カーテン、ケイブパールなどが見られます。また洞穴内にはダイトウサワダムシ、タマゴグモ科の一種などの貴重な動物がすんでいます。

ます。この洞穴は、島の地史を解明する上で貴重なものです。



石灰沈殿物によって形成されたリムストーン



北泉洞。様々なタイプの鍾乳石が発達しています。





天井から水滴がしたたり落ちるときにできるストロー（鐘乳管）



ストローの拡大



石筍、つらら石、フローストーンなどがみえます。



天井のつらら石と石筍が互いに成長し連結してできた石柱



カーテン状の鐘乳石から白い糸状のもの（ヘリクタイト）が横に伸びています。



巻せんべい状に垂れさがったカーテン（幕石）

\*





# みなみだいとうしまひがしかいがんしょくぶつくんらく 南大東島東海岸植物群落

指定年月日:1975(昭和50)年3月18日 所在地:南大東村字旧東

南大東島は、日本でも例の少ない隆起環礁の島で、島の周囲の多くは切り立った崖になっています。島の東側には、地元で「海軍棒」と呼ばれる海岸があり、その一帯はやや平坦になっており、いろいろな植物が生えています。主なものをいくつか挙げると、イソフサギやミズガンピ、アツバクコ、ポロジノニ

シキソウ、ミルスベリヒユなどがあります。このうち、アツバクコはハワイや東京都小笠原諸島と大東諸島だけにあり、ポロジノニシキソウはオーストラリアやマリアナ諸島、大東諸島にだけ生えています。これらの太平洋を囲む島々の成り立ちや関わり合いを知るためにも、この地域の植物たちは貴重なものです。



海軍棒。名称は1892(明治25)年に日本海軍の調査隊がここに標本を置けたことに由来します。



ミルスベリヒユ



アツバクコ



ポロジノニシキソウ



なんぼくだいとうじ

## 南北大東島の成り立ち～移動する島～

沖縄島から東へ約360kmほどいくと、大東諸島があります。大東諸島は北大東島と南大東島、それに少し離れた沖大東島の3つからなります（沖大東島は、現在は無人島で米軍の射撃場として使用されているため、立ち入ることは出来ません）。

南北大東島（以下、大東島と書きます）について多くの学者が調べた結果、大東島の地形は、琉球列島（沖縄島を含む周辺諸島）とは異なる特徴をもつことがわかっています。

島は断崖絶壁で囲まれ砂浜がないほか、島の中央部はへこみ、上から見るとまるでドーナツのような形をしています。山や川もないこのような独特の地形はどのように形成されたのでしょうか。

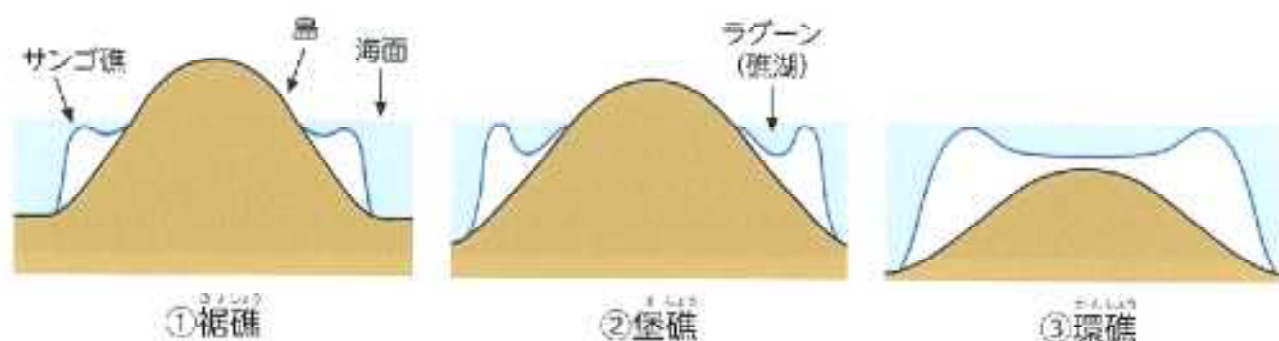
それを知るカギは、「ダーウィンの沈降説」です。それによると、サンゴ礁の地形は裾礁、堡礁、環礁という3つに分けることができ、次の過程で形成されたと考えられています（下図）。①最初に海底火山によって島ができあがると、島を取り囲むようにサンゴ礁が形成されます（裾礁）。②次に島が地殻変動によってゆっくりと沈むと、島の沈降と並行して周りのサンゴ礁が水面に向かって形成されます。その結果島とサンゴ礁の間に浅い湖だまり（ラグーン）をもつ地形が形成されます（堡礁）。③その後も島が

沈み続けると、中心部の陸地は水没し、周囲のサンゴ礁だけが水面に現れたドーナツ型の地形（環礁）が形成されます。

これを頭に入れながら改めて大東島の地形をみると、島を取り囲むように周囲が高く、中央部が低いという地形はまさに環礁と同じであり、それが海面から上昇した結果、現在の大東島が出来たと考えられるのです。

大東島の特徴はこれだけではありません。大東諸島は今から4800万年前に、赤道付近のニューギニア島あたりで誕生したと考えられているのです。少し詳しく説明すると、地球の表面はプレートと呼ばれるいくつかの岩盤に覆われており、このプレートは移動することがわかっています。つまり、赤道近くの海底火山によって生まれた大東諸島は、フィリピン海プレートにのって、4800万年の時を経て、現在の場所にたどり着いたというわけです。ちなみに最近の研究では、大東諸島は現在も1年間に約9.8cm北西（琉球列島に向けて）へ移動していることがわかっています。

少しずつ琉球列島に近づいている大東諸島。将来私たちの子孫が大東諸島を間近に見る日がくるかもしれません。といってもあと200万年後の話ですが。





## 大池のオヒルギ群落

指定年月日:1975(昭和50)年3月18日 所在地:南大東村字北

DATA

学名 *Bruguiera gymnorhiza*

ドーナツのようなかたちをしたサンゴ礁(環礁)が隆起してできた南大東島の中央には、塩水を含んだ池がたくさんあります。そのうちで一番大きなものが大池です。ここには、高さ3~5m、筒高直径が15~20cmになるオヒルギが多数生えています。普通、オヒルギは河口などの泥地に生え、マングロープをつくる植物として知られています。このオヒルギ林のように、河口ではなく島の内側に閉じ込められているのは、世界的にも珍

しいものです。

オヒルギは、長さ20cm程の胎生種子が、海流などに流されて分布を広げると言われます。海とつながっていない大池に、どうやってオヒルギが入り込めたのでしょうか。南大東島の成り立ちや、オヒルギの生態を知るためにも、この場所のオヒルギ林は貴重なものです。

国指定天然記念物

植物



オヒルギ群落の遠景





内陸部にはたくさんの池があります。矢印が大池です。(1985年撮影)

\*



大池側から見たオヒルギ群落近景



オヒルギの幹および根(膝根)がみられる林内の様子

# 用語の解説

## 胎生種子



オヒルギの胎生種子



普通、植物の種子は地面に落ちた後に発芽するけれど胎生種子は、母樹についたまま発芽して根や将来茎になる部分を伸ばして、キュウリのような形にまで育った後地面に落ちるんだ。



# 宮古諸島







八重干瀬 (p94-95)

### 地域を定めず指定の天然記念物 (宮古諸島)

- コウノトリ (p138)
- オカヤドカリ (p148-149)
- ジュゴン (p152-153)
- カラスバト (p160)
- リュウキュウキンバト (p161)
- イイジマムシクイ (p165)
- キシノウエトカゲ (p167)
- ミヤコサワガニ (p189)
- ミヤコカナヘビ (p190-191)

宮古馬 (p98)

東平安名岬の  
隆起珊瑚礁海岸風衝  
植物群落 (p100)

宮古島保良の石灰華段丘  
(p96-97)

#### 道路凡例



国道



県道・郡道・市道



市道・町道



しもじじま とお いけ  
下地島の通り池

📅 指定年月日: 2006(平成18)年7月28日 📍 所在地: 宮古島市伊良部字佐和田下地

DATA

## 指定経緯

1974(昭和49)年2月22日、沖縄県指定  
1982(昭和57)年7月5日、一部改正  
1985(昭和60)年3月29日、一部指定解除

下地島の西海岸近くには、直径が55mと77mの二つの池があります。二つの池は地下の洞穴でつながっており、さらに海に近い方の池は、地下の洞穴によって海ともつながっています。琉球石灰岩の中にできた鍾乳洞に海の水が入りこみ、波の力で洞穴がけずられて大きくなるうちに、天井の2カ所がくずれて池になったと考えられています。このような海岸近くの石灰岩洞穴が作りあげる地形は珍しく、周囲に見られる植物とともに、石灰岩特有の地形を研究する上で貴重な場所です。



通り池付近の風景



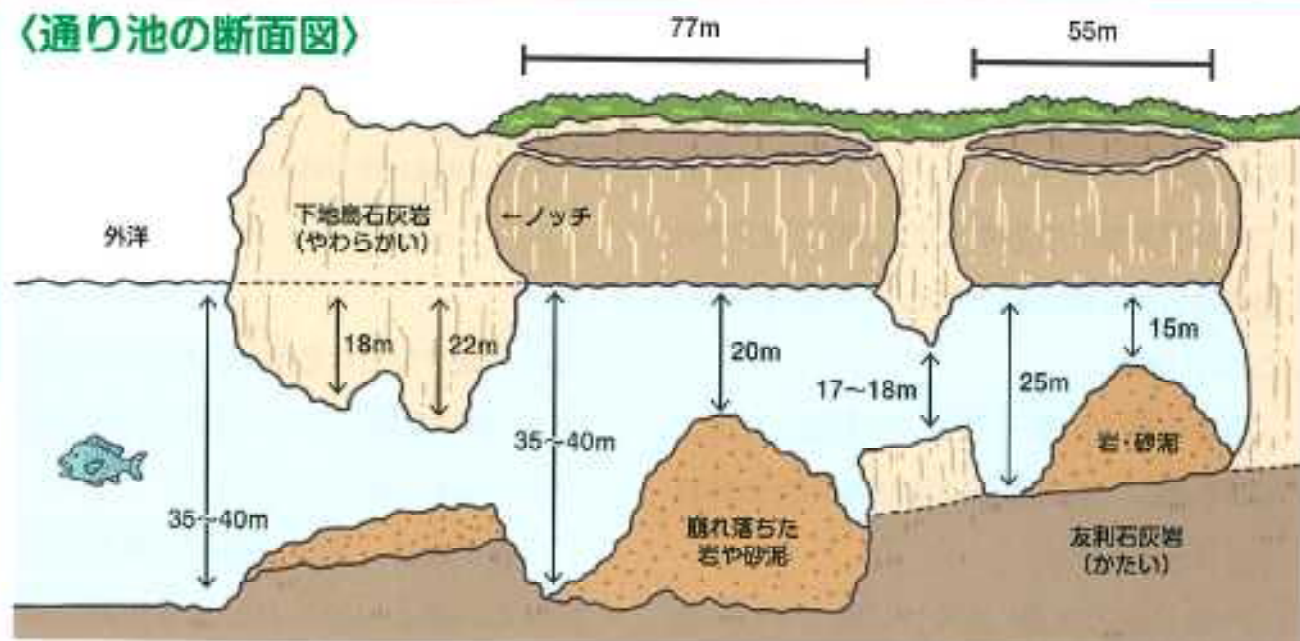
海に近い方の池

国指定天然記念物

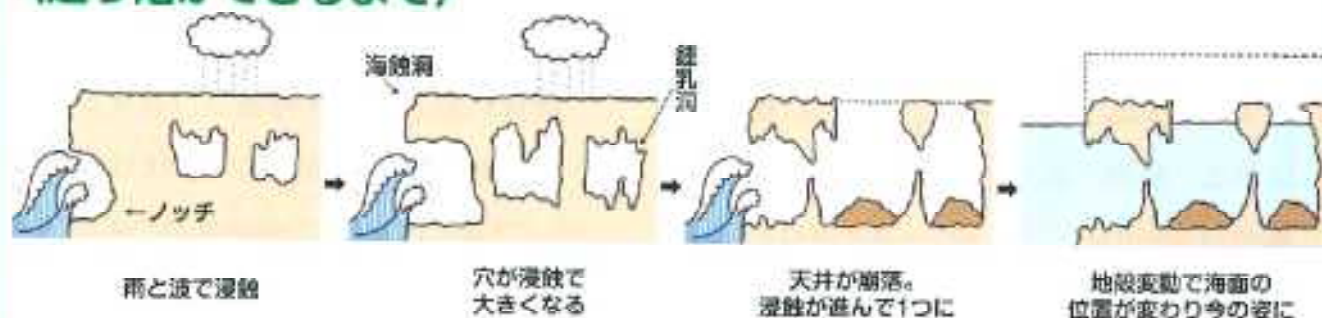
地質  
鑑賞



## 〈通り池の断面図〉



## 〈通り池ができるまで〉



宮古島市教育委員会（2017）を基に作成



## ヨナタマ伝説

く かえ お よ こ だい お お つ な み あかし  
～繰り返し押し寄せた古代大津波の証～

昔、下地島に木泊という村がありました。ある晩、村の漁師が上半身は人間、下半身は魚という、摩訶不思議なヨナタマという大きな魚を釣り上げました。珍しい漁師は、翌日、村のみんなと食べることにしました。

その夜遅く、漁師の隣の家の子どもが「伊良部島に行こう」と泣き出し、どんなになだめても泣き止みません。母親が子どもを抱いて外に出ると、沖の方から「ヨナタマ。ヨナタマ。お前はどこにいる？早く竜宮に戻っておいで」と威厳に満ちた声が響いてきました。

それは竜宮の王が娘のヨナタマを心配して呼ぶ声で

した。漁師の家に捕らえられたヨナタマは、「お父様、私はもうすぐ殺されます。早く大波を送って助けてください」と応えました。それを聞いた母親は怖くなり、急いで子どもと一緒に伊良部島へ逃げました。しばらくすると大波が押し寄せ、島中のありとあらゆるものを洗い流してしまいました。

命からがら逃げて生き延びた親子が大波が引いた村に戻ってみると、漁師の家と自分の家があった所には、大きな穴があき、ふたつの池ができていました。

この時にできた穴が、「通り池」だと言われています。



# 八重干瀬

指定年月日: 2013(平成25)年3月27日 所在地: 宮古島市平良字池間安段嶺地先、同字大神フデ岩

DATA

## 指定経緯

2014(平成26)年10月6日、追加指定

八重干瀬は、宮古島の北西1.5kmに位置する池間島からさらに北へ5～22kmの範囲におよぶ海域に位置するサンゴ礁です。その面積は広大で東西約6.5km、南北約17kmにわたります。

春から夏の大潮干潮時には海面上に広大な姿を現し、その面積は宮古島の約3分の1に達するほどです。

八重干瀬の発達したサンゴ礁上では、台風または津波で動いたと考えられる直径数mもの大小のサンゴ岩塊が散乱しているようすを見ることができます。また、八重干瀬は過去に陸地であった可能性が高く、それを裏付けるものとして、ドリーネと呼ばれる石

灰岩地域で見られる窪地の地形が見られるほか、陸地を取り囲むように形成される礁池(ラグーン)の跡も見られます。

八重干瀬は、琉球列島の伝承及び生活・文化との関わりの上から価値が高いほか、景観が素晴らしいことから名勝としても指定されています。

琉球列島の海岸を特徴づけるサンゴ礁の一つであり、わが国最大の卓状サンゴ礁群としても高い学術上の価値を持つものです。

国指定天然記念物

鉱地質  
鉱物



八重干瀬(干潮時に干上がった様子)





礫地の跡（ドゥ南側から）

※



津波石（フガウサ）

※



津波石（フガウサ）群

※



ドリーネ（ドゥ灯標西方を北側から）

※

写真：米 哲人



# みやこしまぼら せっかい か だんきゅう 宮古島保良の石灰華段丘

指定年月日: 2016(平成28)年10月3日 所在地: 宮古島市城辺字保良

石灰華段丘とは、棚田のような形をしたカルスト地形の一種です。保良宮土地区の崖下に長さ約70m、幅約30mの範囲で見られます。宮古島の地質構造は、中新世から鮮新世の砂や泥から成る島尻層群を基盤とし、その上を厚さ約10～50mの琉球石灰岩(更新世のサンゴ礁)が不整合で覆っています。また島全体の地形は、東側が高く西～南西側に向かって緩やかに傾斜しています。そのため、島の東端の保良地区では、海岸の崖中腹部の島尻層群と琉球石灰岩の境界部の不整合面が露出し、保良宮土地区の崖の部分で湧水として流れ出ています。

湧水中の炭酸カルシウムは、水分の蒸発とともに石灰分だけが沈殿物(石灰華)としてかたまり、石灰華によって縁取られた小

な池が順次形成されて、全体が棚田のようにみえます。石灰華段丘は鍾乳洞で形成されることが一般的ですが、この石灰華段丘は露出環境下で発達したものとしては国内最大規模であるという点で貴重な存在です。



棚田のような石灰華段丘



宮古島保良の石灰華段丘





湧水が流れ出てくるところを横からみる

\*



湧水が流れ出て海の方へ広がっています。



石灰華段丘を横からみる

\*



陸側から海方向をみる



いろいろな形をした池（リムプール）

\*



石灰華段丘を正面からみる

\*



みやこうま  
宮古馬

指定年月日: 1991 (平成3年) 年1月16日 保存団体: 天然記念物宮古馬保存委員会

## DATA

学名 *Equus caballus*

宮古馬は、与那国馬と共に沖縄県に二品種いる在来馬のうちの一つです。体の高さが120cmくらいの小型の馬で、毛色は鹿毛や栗毛が多く見られます。頭が大きい割に胴体の後部はやや貧弱ですが、ひづめは太くて堅く、足は丈夫です。さらに病気にも強く粗食に耐え、性質はおだやかという特徴を持っています。

宮古馬がどこから持ち込まれたのかは不明ですが、長い歴史の中で農耕などに利用

され、沖縄の気候風土にあわせて変化してきたと考えられます。また、琉球国時代には中国へ輸出した記録もあり、貿易品として重要な役割を持っていたことがわかります。農耕の効率化に伴う大型馬への改良や、農耕の機械化の中でその数は減少しています。現在の個体数は約50頭で、宮古島市では保存活動が進められています。



宮古馬



体高約120cm



(左) 鹿毛 (右) 栗毛



# くになかうたき しょくぶつぐんらく 国仲御嶽の植物群落

📅 指定年月日: 1974(昭和49)年2月22日 📍 所在地: 宮古島市伊良部字国仲

国仲御嶽は伊良部島の国仲集落の東側にあり、屋でも暗い鬱蒼とした森になっています。ここは、宮古島で最も自然の状態に近い森として貴重なものです。国仲御嶽のある場所は、拝所ということで昔から集落の人々に大切に守られてきました。そのため素晴らしい森が残ったのです。御嶽の中には60種類以上の植物が見られ、胸高直径25～45cmのフクギやリュウキュウコクタン、ヤブニッケイなどが生え、高さ5～9mのタブノキ、セン

ダン、オオバギ、リュウキュウマツなどの他、シダ植物、つる性植物などが茂っています。ここはまた、国際保護鳥であるサシバが、南方へ渡る際の重要な休み場所ともなっており、動物にとっても貴重な森です。



国仲御嶽。入り口から長く続く道の奥に祭祀を行うイビがあります。安易に人をよせつけない神秘的な雰囲気には満ちています。



県指定天然記念物



植物



# 東平安名岬の隆起珊瑚礁海岸風衝植物群落

指定年月日: 1980(昭和55)年4月30日 所在地: 宮古島市城辺字保良平安名

宮古島の東平安名岬は、宮古島市城辺の東端にあり、太平洋につきだした長さ約2km、幅約250m、高さが約20mの隆起サンゴ礁でできた台地です。ここにはいつも強い潮風が吹きつけるため、崖の上や崖面、崖の下などで強風に適応した植物を見ることができます。

この地域では222種類の植物が確認され

ており、大群落を形成しているテンノウメの他、テンジクナスビやミヤコジマソウ、ミヤコグサ、ミヤコジマツルマメなど、他の地域ではあまりみられない貴重な植物が含まれています。東平安名岬の植物は、海岸という厳しい環境に生える植物の特徴や、沖縄の植物の分布を考える上で貴重なものです。



東平安名岬  
北側の風景



テンノウメ



ミズガンビ



ミヤコジマソウ



# しおかわ うたぎなら なみき 塩川御嶽並びにフクギ並木

指定年月日:1974(昭和49)年10月3日 所在地:多良間村字塩川

多良間村

多良間島の塩川御嶽は、フクギの多い御嶽として知られています。特に御嶽の入口に続く道には、胸高直径20～45cmのフクギ約390本が、およそ650mにも渡って並んでいます。これらのフクギは1736年に植えられたと言われ、フクギの寿命や生長の様子を知る上で貴重なものです。御嶽林には、フクギやイヌマキ、リュウキュウコクタンなどの高木、モクダチバナなどの垂高木があり、階層構造が見られます。また御嶽林の中には、津

波によって打ち上げられたと伝わる大きな岩があり、その上にはアコウやゲッキツ、オオバギなどが茂っています。



御嶽の林内の様子



塩川御嶽に続くフクギ並木

県指定天然記念物

植物



# うんぐすく う た き ぐんらく 運城御嶽のフクギ群落

指定年月日:1974(昭和49)年10月3日 所在地:多良間村字仲館

DATA

学名 *Garcinia subelliptica*

多良間島の運城御嶽は、今から約500年前にできたと伝えられており、古くから島守りの御嶽として大切にされてきました。そのため、御嶽全体が鬱蒼とした森で包まれています。特にフクギとイヌマキが目立ち、高さ8m、胸高直径が20~30cmのものが多く生えています。その他、アカギやセンダン、タブノキなどの高木もあります。またナガミボジョウジやツゲモドキ、リュウキュウガキなど、石灰岩地域に特有な植物も多く、宮古諸島を北限地とするヤエヤマクマガイソウも見ることができます。この御嶽の森は、多良間島本来の自然植生に一番近い森と言われ、宮古諸島の海岸植物林の成り立ちを考える上で貴重なものです。



参道入口の鳥居とフクギの大木



参道のフクギ並木



# 多良間島の土原御嶽の植物群落

指定年月日:1974 (昭和49) 年12月26日 所在地:多良間村字仲筋

多良間村

土原御嶽の植物群落は、仲筋集落西側の境内と後方山手のおよそ500mにわたって広がる森で、大木がとても多いことが特徴です。土原御嶽は旧暦8月に行われる「八月踊」などの豊作祈願が行われる御嶽です。そのため、御嶽の祠のそばには踊りのための舞台があります。舞台のそばに生えているアカギは、樹齢およそ250年と言われ、高さ13m、胸高直径が130cmもあります。この木を中心に、デイゴやフクギ、ガジュマル、イヌマキ、テリハボクなどの大木が、およそ30本も見られます。このような大木が御嶽内で広範囲に森をつくっている例は他にありません。



舞台の屋根は大アカギを避けるように作られています。御嶽内の樹木が大切にされていることが分かります。



御嶽内の様子



# 多良間島の嶺原の植物群落

指定年月日:1974(昭和49)年12月26日 所在地:多良間村字仲筋

多良間島の北西部、八重山遠見台と長嶺山の間にあたる嶺原地区には、イヌマキやテリハボクなどの高木を中心とした森があります。森には推定樹齢400年と言われるフクギの大木や、周辺には嶺原御嶽もあり、昔から大切に継承されてきた場所です。また、平たい地形の多良間島の中で、こんもりとして鬱蒼とした森の景観は海上からも見えることから、昔は航海の目印にもなったと言われていました。森の中に入ると、高木の下にフクギやタブノキ、アカギなどの亜高木があり、その下に低木のゲッキツやイヌビワ、アダンなどが生えています。人々がこの島に住んでいなかった頃、多良間島はこのような森が占めていただろうと考えられています。嶺原の

森は隆起サンゴ礁石灰岩地域に生える植物や、多良間島本来の自然の森を考える上で重要です。



植物群落内のフクギの大木



指定地全景



# 多良間島の抱護林

指定年月日: 1974(昭和49)年12月26日 所在地: 多良間村字仲筋、同字塩川

多良間村

多良間島の抱護林は、字仲筋のトカバナ山から字塩川の白嶺山にかけて、幅10～15mの林が約1.8kmにわたって、集落を取り囲むように続いています。これは集落や農地を台風や潮風から守るためにつくられた人工的な林で「抱護林」と呼ばれており、いわば緑の壁です。林内には高さ6～7m、胸高直径20～50cmのフクギの太木を主体に、テリハボク、デイゴ、モクダチバナ、イヌマキなどが生えています。このような抱護林は、かつては各島々にあり、集落や農地を災害から守ってきました。多良間島の抱護林は、沖縄に残された唯一の抱護林と言われており太

変質重なものです。この抱護林がいつ頃つくられたのかは分っていませんが、おそらく琉球王国時代の蔡温(1682～1761年)による林業政策の一つだろうと考えられています。



抱護林の幅は狭く、畑を守る壁のようです。



遠くにみえる林が指定地の抱護林

用語の解説

蔡温

1682～1761年。琉球王国特代の代表的な政治家で、治水や農業改革、林業振興に大きな功績を残した。正史『中山世鑑』の改訂も行っている。

県指定天然記念物

植物